

隼人族の森を渡る風

創造の現場から 第47回

森の彫刻家 上床利秋

ハキリバチの悲しみ

今年の夏は特に暑かった。杉アトリエは森の中にあるとはいえ、37℃になるうかという気温には、毎年悩まされる蚊でさえも葉陰でじっとしていて動かなかった。

そんな時、ぶーんと羽音を立ててアトリエに飛んでくる奴がいた。黄色の長いものを抱えた蜂らしきその生物はアトリエ内で乾燥させている杉の木の輪切りにできた「洞」の隙間に入っていた。

「こんな所に巨大な蜂の巣をつくられたらたまらんなあ」と思った私は、そいつが居なくなった頃を見計らって殺虫剤を木の隙間にシュー——ツとひと吹き噴射しておいた。これでもう臭いを嫌がって来ることもないだろう。

数日後、ふと思いついて噴射した杉の木の洞の隙間を覗いてみたら、なんとその蜂は出口から顔だけを出してじっとしていた。

侵入者への門番をしいやがる、殺虫剤に怒っているかもなあ。

また出て行つてから嫌がる殺虫剤で攻撃してやれ。

ところが次の日、そこを見ると、昨日と全く同じ姿で動かない。でも、全く動かないのはおかしい。おそろお

そろつとしてみると、なんとその蜂は門番したままの姿で死んでいたのだ。まるで弁慶が立ったまま絶命したかのよう。

私はとてもむごい殺し方をしてしまったよつた。

ピンセットでその死骸をつまみ出し、木の中を懐中電灯で覗いてみると、緑色の葉でぐるぐる巻きになった長さ2センチ程の小さな葉巻のようなものが奥にある。一つずつ取り出すと、それらは1列に並んでおり、奥に四つ出てきた。その葉っぱを開いてみると、花粉と蜂蜜に包まれた卵らしきものがそれぞれに入っていたのだ。

いつの間にかこの蜂はせっせと巣作りをしていたのだろう。そんなことにも気がつかず、最近では蜂が多いなあと思いついて考えた自分も恥じた。それ以上になんか卵たちを護ろうと嫌な殺虫剤の臭いにもめげずに巣から逃げようとせずに残留した親バチの心をもっと、可哀そうなことをしたという気持ちも湧いた。そして、子育ての親の強さは人間も虫も変わらないのだということ強く思い知らされた。

その蜂はハキリバチのメスと図鑑

に解説されていた。

日展会員 白日会会員 日本彫刻会正会員



ぐるぐるに巻かれていた葉を開いてみた



門番をしているかに見えた親バチだったのだが...



アトリエに保管していた杉の木

レモン画材絵画教室 **ご案内**

- 隔週水曜日 10:00～ 油絵・水彩教室
- 隔週土曜日 16:00～ 油絵・水彩教室
- 隔週日曜日 16:00～ デッサン
- 隔週土曜日 ①10:00～ 子供絵画教室
②13:30～
- 月1回 第2火曜 10:00～ 和紙ちぎり絵教室

お申し込みは TEL 0995-45-1015 国分進行堂・レモン画材まで



この森のアトリエで彫刻を共に作ってみませんか

ホームページ刷新しました。
<https://douzou.jp/>

上床利秋 **検索**

このページのバックナンバーもカラーで読むことができます。

